

女同士とかありえないでしょ

と言い張る女の子を、

百日間で徹底的に落とす

百合のお話 2

作 みかみ てれん

画 雪子

「いやいや、そんな、女同士でとかありえないから！」

そう叫んだ直後、あたしはしまったって口を塞いだ。いや、いやいや、ていうか悪いのは絢だし。いきなりそんなこと言われたら、誰だって悲鳴をあげるっての。

だってさ。

「『私と鞠佳まりかが付き合ってること、クラスのみんなに言ってもいい？』なんて、絶対ムリだから。ありえないって」

あたしは読んでいたマンガを閉じて、机の上に置き直す。

きょうは休日で、昼下がりの絢の部屋。夏休みも終わって、でも夏休み前とは明確に違うところがあって、それはあたしと絢のカンケイだったり、距離感だったりする。

不破絢ふわあやは高校二年生の女の子で、クラスメイトで、同年代がなりたい顔ランキングを取ったらぶっちぎり一位を獲得するぐらいの美人だ。

誰もが羨むような綺麗な肌とか、キューティクルな髪とか、おつきくてぱっちりした目だとか、こなれたメイク力だとか、さらに女優たちがあたしたちにインスタでアピールし続けている『どう？ このスタイルどう？ これがオンナの目指すところだし

よ?』という理想像を、身近で無意識かつ無自覚に見せつけてきやがる女で——。

——そして、あたしの恋人だ。

絢とはゴールドデンウィーク明けにちよつとしたイベントがあつて、あたしたちは仲良くなつた。いや、素直に仲良くなつたつて言うと言つて語弊があるな……。なんだろう、濃い百日間で絢の毒牙にかけられた、とかかなー……。

あたしの拒否感に対して、向かい合つて座つていた絢は不機嫌そうだ。こつちをダイエツト仲間がひとりだけパフエ頼んだときみたいなの、じとーつとした目で見ってくるし。

「鞠佳の口癖。『ありえない』」

「……だつて、急に絢が」

「そんなにおかしなこと? 理由がよくわからないけど」

鞠佳気にしすぎじゃない? みたいなの、こつちに原因を押しつけるような言い方にはさすがにカチンときた。いや、あのね……。

「いやいやわかるでしょ! てかわかれつて話でしょ!」

付き合つてるつてことを、クラスで公表?

女同士で? しかもこのクラスの人気者、さかきばらまりか榊原鞠佳とふわあや不破絢が?

「ありえなさでビックバンが起きるわ!」

「理由」

マジかこの子。いちからか。いちから説明しないとダメか。

「絢はビアンバーとかで働いてるから、学校なんていう狭い常識が通用しないのかもしれないんだけど、学校っていうのはひとつの世界なの」

「うん」

そんな問題は小学校でとつくに習ったからわかりますけど、って顔してるけど、わかってるならカミングアウトしようぜ、とか言い出さないからね？

「だいたい、あたしと絢が付き合うって、回りのみんなはどう反応すればいいのかわかんなくなるでしょ？ 物珍しさでパンダみたいになったり、突っつかれてヘンなこと聞かれたり。メンドクさいでしょ、絢もそういうの」

「無視すればよくない？」

「人付き合いいい！」

あたしはカーペットに向かって叫ぶ。

絢とあたしは付き合っているし、あたしはちゃんと絢のことは好きだ。す、好き……うん、まあ、好き……だ。面と向かって言うのは恥ずかしいけど……好きです、はい。心の中ではけっこう素直になりました。

でもね、絢のこういうところはホント理解できないし、これから先もずっとすれ違うんだらうなーって思うと、正直かったるい……。

なんであたしこの子と付き合ってるんだろ……。価値観、ゼンツゼンあわないのに。頭を抱えていると、横にきた絢があたしの腰に腕を回してきた。あによ。

「スキンシップされても、それであたしが首を縦に振ったりしないからね」

「いや、これは触りたいから触っているだけ」

「そうですか……」

腰からおしりを撫で回され、そのままもう片方の手がふとももをまさぐってくる。くすぐったさよりも優しく、きもちよさよりも甘ったるい感覚だ。

あたしの私服はだいたいミニのスカートだし、トップスも薄手のもの愛用してるので、そりゃちよっかい出しやすかるうよ。

ひよっとして……またこいつ、勘違いしてないでしょうね。釘刺しておかないと。

「言っとくけど、絢にイジられたくって、こんなカッコしてるわけじゃないからね」

「ちがうんだ」

「違うから！ これはあたしの趣味であり、主義であり、スタイルだから！」

「果物ってさ、すごいよね」

急にどうした不破絢。

果物。りんごとかみかんとか？

「人間においしくたべられるために進化したわけじゃないのに、でも人間にとっておい

しいから、果物ってすごいよね」

「……………あたしのファッションとそれ、なんか関係あるんですかねえ」

「とくには？」

絢は上品に微笑している。誰が絢においしく食べられるために育った鞠佳だ、誰が。

「ほんつと、絢って自分勝手……………」

水の入ったコップに一滴、絵の具を垂らしたみたいにも、絢が表情を変えた。不安めいたその眼差しが近づいてきて、あたしの顔を覗き込む。

「……………嫌いになる？」

うっ。

いや、誰もそんな話してないじゃん……………。

「ならない、けど……………」

「じゃあ好き？」

「嫌いと好きの間には、とてつもなく大きな『割とどうでもいい』って川が流れてるんだよ」

「好き？」

むむむ。

「好きな……………ほう、ですけど」

「もう一声」

家電製品の値引きかなんかじゃないんだから。

「ああもう、好き、好きだから！ これ以上言わないよ！ はい、おしまい！」

「ん、私も鞠佳が好き」

「もー……」

両手で手のひらを握られる。さすられる。うなじに顔をうずめてきた絢が、あたしの首筋にキスをする。はいはい、仔猫みたいです。かわいいか。かわいいってば。

きょうは毎月十八日の百合姫コミックスの発売日なので、マンガを読みに来ただけだ。っていうのに、結局いちやいちやしてくるんだから。……別に、キライじゃないけど。

「どうしてもダメ？」

ん……？ とあたしは一瞬話題を見失う。ああ、さっきの『クラスにカミングアウトするかどうか』の話だ。てつきりもう終わったかと思ってた。

「だいたい、そんなことするメリットなくない？」

「あるよ」

絢はあたしの髪を細い指先で撫でながら、胸を張った。

「鞠佳が私のものだってことを、クラスに知らしめられる」

「いや……それこそ別に、どうでもよくない……？」

あんまり絢がアホなことを言うから、『いやあたし絢のものじゃないし!』っていうツッコミすらも忘れてしまった。

「これから文化祭とか、修学旅行とかあるからね。鞠佳は友達と卒業旅行にいったりもするんだよね」

「まあ、そうなるかな。悠愛^{ゆめ}とか、知沙希^{ちさき}とかと」

それまでバイト代がたまってたからね、つて続けようとしたけど、『お金なら私が出してあげるよ』とか言われそうなので黙る。

ちなみに前回、絢から危うく渡されそうになった百万円は、返却していた。だってあれは絢がコツコツとバーテンダーをやって、バイト代を貯めたものなんだし。

絢はさつきより少しだけマジメな表情になる。……まつげ長いし、顔がいい。

「鞠佳が友達とたのしく思い出を作ってるときに、そばにいられないっていうのは、なんだか寂しいなって思ったから」

「う……それは」

せつかく同じクラスなのに、と絢はこぼす。その気持ちはわかる、けど……。

あたしはそのシユンとした顔にほだされなかった。

「待って。だったら別に、恋人って言う必要はない？ 友達でよくない？」

絢は急にあたしを憐れむような目をした。どゆこと。

「だって鞠佳、誘い受けだしチヨロいから。首輪をつけておかないとどこの誰に流されて一線こえちゃうか、わからない」

「おいこらー！」

あたしは絢に思い切り怒鳴る。絢は休日のお昼、選挙カーの演説を聞いたみたい顔をしめた。な、納得いかない。

「またその話を蒸し返すつもりか！ あたし誰かについてったりしないし！ 3Pとかしないし！ 浮気性なのは絢のほうでしょ！」

「私はもうしないよ。ちゃんと恋人ができたから。でも鞠佳は……なんか、同性愛者を引きよせるフェロモンがある」

「ないわ！」

「あるよ。ぜったいある」

絢の眼力の強い視線で見つめられると、えっ、そ、そうなの……？ あるの、かな……とか思っちゃいそうになるけど、いかんいかん、自分を強くもて。そういうところだぞ、榊原鞠佳。

「あのね、いくらこんなユルそうな見た目してるからって、あたしは、その……絢の、カノジヨ、なんだからね？ ちょっとは信じてよ」

「もちろん。信じてるよ」

絢があたしを後ろからぎゅっと抱きしめてくる。

「でも、他の人が鞠佳を好きになるかもしれないから心配。かわいいし、鞠佳」
「むう……」

そうだ。絢の心配性は今に始まったことじゃない。もともとあたしの百日間を百万円で買おうとしたあの一件だって、心配性から始まったようなものだ。

後ろから抱きしめられると、とくんととくんと絢の鼓動が聞こえてくるみたいで、なんだか安心してしまふ。……でもこれ、またごまかされてない？ まあいいけど……。

「とにかく、カノジョだって明かすのも、まずは友達をちゃんとできてからね」
そう言っつて、とりあえずこの件を先延ばしにする。あたしと絢が本気で対立したら、最終的にあたしが折れることになるんだろなっつていう予感がするし……。

で、課題を与えられた絢は首をひねった。カーテンから差し込む陽の光を浴びて、その髪がサラサラと輝いて見える。

「ともだち」

まるで未知の単語を聞いた異星人みたいだ。

「友達って、どうすればいいの？」

「まじで？　そういうレベル？」

「私なりに答えはあるけど、鞠佳の求めるレベルは高そうだから」

うーん、どうなんだろう。でもまあ、それはそうなのかも。

「だったらまずは、悠愛とか知沙希とうまくやつてもらいたい、かな……。あのふたりと友達になってくれたら、自由行動とか卒業旅行とかに誘いやすいし。学校でも一緒にいられる時間が増える、と思う」

「ん」

「そのためには、まず身だしなみもきちんと……。って、それは問題ないか」

上から下まで絢を眺める。いつもどこで服買ってるのか知らないけど、どうせいい店に違いない。きょうはシュツとしたシャツとレースのキュロットスカート。大人びたコーデイネートは大学生どころか、社会人にすら間違えられそうだ。絢はいつともキレイだし、かっこいい。

「正直めんどくさいと思うけど、女子グループってそういうものだからね……。あたしも協力はするけど、結局は絢次第かな」

「わかった」

絢はこくりとうなずいた。ふたりきりの部屋に、その宣言が小さく響く。

「がんばるよ」

「……ふうん」

あたしは肩越しに絢を振り返りながら、受験生みみたいな真剣な眼差しを茶化す。

「学校なんて、勉強しにいくところだって言い張ってたのに」

「そのきもちも今は、今でもかわってないけどね」

絢はまたあたしに抱きついてきた。ちゅっちゅっど湿った音を鳴らしながら、あたしの首にキスの雨を降らせる。ちよつとくすぐったい。

「学校には、鞠佳がいるから。鞠佳が好きなのを、私も好きになりたいの」

「え？ ……そ、そんな理由なんだ」

絢の裏表のない言葉に、自然と顔がほころんでしまった。

なんか…ちよつと…いや、かなり、嬉しいかも。

あたしは学校が好きで、絢は学校に興味ないって言ってたから、別にそれはそれでゼンゼンよかったんだけど…。絢は変わろうとしてくれているんだ。あたしが絢に出会って世界が広がったみたいだ。

あたしはいつものメンバーの中に絢が混じっていると想像してしまう。それを叶えるために乗り越えなきゃいけない壁はきつといくつもあるだろうけど…でも、実現できたら、きつと、すごく楽しいだろう。

あたしのために努力してくれると言った絢の頭を撫でてあげる。

「いい子いい子」

「なにそれ、誘ってる？」

「違うし！」

どんなときも、絢は頭の中ピンク色だった。こいつめ。

「じゃあ……百日間ぐらいであたしのグループに馴染めるように、がんばってね、絢。あたしもサポートするからさ」

「百日間もいらないよ」

絢は首を振り、あたしの唇を奪ってくる。

「鞠佳がいてくれるんだもの。三十日あれば、じゅうぶん」

というわけで、大口を叩いた絢だけど、あたしは『さすがにムリでしょ』と高をくくっていた。絢がどんなに美人でも、学校には学校の社会がある。中学二年生以降、その関わりを絶ってきた絢が、一ヶ月間でいきなりトップグループに乗り込んでこようなんて、ムリな話だ。

ま、チャレンジするだけチャレンジして、あたしの凄さを思い知ってくれたらいいんじゃないかな、なんてあたしは楽観的に考えていた。

しかし、あたしはまだまだ自分の恋人を、不破絢を見くびっていたのだった。